

わたしの聖戦

◎◎女性が働くということ◎◎ 43

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津江

「宝くじ」ドリーム

かつて、「ウチの夫は本当に素晴らしい、宝くじにあたったようなものだ」と思っている」とコトあるごとに口にする人がいた。今どき妻からこんな風に言ってもらえるとは、稀（まれ）な話である。

宝くじにあたったようなもの……、それほど宝くじにあたるのは珍しいということであるが、実際宝くじほど人々の心をかき乱すものはない。突然、思いもかけなかった大金を手に入れることができる。それは多くの庶民にとっての夢であり人生のビッグチャンスである。どんなお金にも

なんらかの税金が課せられる時代に税金がかからないのも魅力的、ギャンブルに関心のない人であっても、宝くじは別という人がほとんどである。

宝くじをあてるのは、交通事故に遭う確率よりも低いと聞くが、確かに周囲をみても宝くじにあたったという人の話ばかりに耳にしない。しかし当選者は必ずいるはずであり、以前はヴェールに隠されていた彼らの顔も、近頃はちらほら登場する場面に出会うようになつた。

先日、当選者に対するアンケートを目にした。それによると、宝くじを

購入するときにごだわったことは1位が「買う場所」であった。どういうわけか全国各所に宝くじがよくあたる場所というのがあり、発売日には長蛇の列ができる。たまたま近くを通りかかったことがあつたが、これまた偶

また、当選で得たお金を何に使ったかの質問には、1位が「貯金」、2位が「借金の返済」との回答、案外突拍子もない答えがなく、やはり宝くじとは庶民の夢なのだと思ひ知らされた。

禁止され、以後宝くじは発売されていなかったという。戦後の成長期に伴い宝くじが現在のようになつたのは昭和34年のこと、意外にも短い宝くじの歴史である。

発売日には長蛇の列ができる



然にもその日が発売初日だったようで、噂以上の混雑ぶりであった。気のせいかな、並んでいる人々の顔には結構真剣なものがあつて、宝くじに賭ける意気込みのようなのが感じられた。

宝くじの原型は江戸時代にみてとれる。大阪にある瀬安寺で、元旦から7日までに参加した人々が自分の名前を書いた木札を唐びつの中に入れて、7日の日に寺僧がキリで3回突き、3人の

「当選者」を選び出したのははじまり。このときには福運の「お守り」を授けられたが、当たった人に与えられるのがお守りから金銭に変わり、全国的に庶民の人気を得たものの、明治に入ってから禁止され、以後宝くじは発売されていなかったという。戦後の成長期に伴い宝くじが現在のようになつたのは昭和34年のこと、意外にも短い宝くじの歴史である。

宝くじは「夢を買う」といわれる。たとえ当選しなくても、あたつたら何を買おう、どこへ行こうという夢を見せてくれる魔法の神（紙）というわけ。宝くじを買うお金を捻（ねん）出すため

にすべての土地を売ったものの、すべてハズレだったという人の話がある。度の過ぎた夢もまた良し、人は夢を語る特権を持っている。

せちがらい世の中、なかなか夢を持ってない昨今であるが、気分が落ち込んだときにこそ宝くじに期待を抱くのも悪くないかもしれない。

イラスト・三浦義雄